

タイ諸語比較研究の展望

三 谷 恭 之

今日われわれがタイ諸語というとき、シャム・ラオ・シャン・アホム・黒タイ・白タイ・ヌンなどのいわゆる＜狭義のタイ諸語＞を指す場合と、これに加えて、雲南・貴州・広西など南中国の各地に分布するチュワン・ブイ・カム・マック・スイといった諸言語をも含めた＜広義のタイ諸語＞を意味する場合とがある。これら諸言語相互の間の、さらに周囲の諸言語とこれらとの間の歴史的発生的関係がどのようなものであったか、互いに並行した構造をもつこれらの諸言語が実はどのような変化過程を経てきたものであるか、といった問題を理解するためには、比較言語学的方法が最も有効であるにちがいない。事実これまでも決して数多くはないがいくつかそのような試みが行われてきた。

当初は、南中国タイ諸語についてよく知られていなかったために、比較研究は専ら狭義のタイ諸語を対象とするものであった。ここでは言語間の類似が、借用要素を除いて、極めて著しく、共通祖語の音素体系を推定する仕事にもさほどの困難は伴わなかった。しかしその後、新たに南中国タイ諸語の報告がなされるに及んで、タイ諸語全体にわたる比較研究は必ずしも容易には行いえなくなってきた。提供された資料が量的に決して十分でないこともいうまでもないが、多くの具体的な問題において、タイ諸語の内部から与えられる情報のみでは解決できず中国および東南アジアのすべての諸言語の詳細な比較研究の結果にまたなければならないものが少なくないと思われる。

今、これまでに行われたいくつかの試みをふり返って検討してみることは意味ないことではないと思う。

1. 言語の比較方法はある意味で対象言語のもつ構造上の特性によって決定される。いわゆる＜音韻法則＞の帰納を基礎的作業とする点ではたしかにすべての言語に対して普遍的であろうが、共通祖語を再構するための具体的な操作についていえば、中核的な構造が孤立的・分析的かつ単音節語的であるタイ諸語にとって、印欧語比較研究におけるように語根と接辞とからの語幹構成の様式といった形態論上の問題は事実上ないといってよい¹⁾。その反面、印欧語にはないトネーム (toneme) の存在が、共通タイ語 (common Tai) の音素体系を推定しタイ諸

(1) もちろん全くないわけではない。たとえば、シャム語の指示詞の体系に見られるような一種の“symbolism” (cf. E. Sapir: Language, 1921, Chap. VI) の現象 (例 nán <あれ>, nán <あの>) が、古代タイ語にも同様にあるいはより広範囲に見られるものかどうかは興味ある問題である。しかしこういう例はごく僅かしかない。

語相互の間に見られる種々の対応関係をよりよく説明する上で重要な役割を果たすことは、他のシナ・チベット諸語の場合と同様である。

タイ諸語比較研究の嚆矢ともいうべき、H. Maspero: "Contribution a l'étude du système phonétique des langues thai" BEFEO, t.XI, 1911. が主としてトネームの対応に関する考察であったのは当然のことである。これは、タイ諸語の形態素の基本的な音節様式 $C_1V(C_2)/T$ [C_1 : 初頭子音(子音結合を含む), V : 主核母音, C_2 : 末尾子音, T : トネーム] において、トネームの対応系列が原則として初頭子音の古代音における有声・無声の対立によって分類されることを示し、そこから一部の音素に対して逆に共通音素の推定²⁾を試みたものであった。

K. Wulff はこの議論をさらに押進めて、Chinesisch und Tai, sprachvergleichende Untersuchungen, Kopenhagen, 1934. において、共通タイ語が中古漢語と同じく C_1V 型音節では3種、 C_1VC_2 型音節では1種のトネームをもつものと推定した。これは正しいと思われるし、その他の点でも Wulff の研究は資料の分析が綿密であって初期の業績のうちでは最も充実したものである。しかし各音素の古代音の推定に際しては、シャム語などの正書法を根拠とすることが多く、諸言語間の音韻対応にもとづいて共通タイ語の音素体系を全般的に明らかにするといった方法は必ずしも十分に行われていない。

タイ諸語では一般に形態素の形の対応の仕方が単純であって、音節 $C_1V(C_2)/T$ において、ある言語の C_1 に対して他の言語の C_1' が、 $V(C_2)$ に対しても $V'(C_2')$ が対応する³⁾。したがって、初頭子音とトネームとの基本的な通時的関係、すなわち共通タイ語における初頭子音の有声・無声の対立の解消に伴って4種のトネームの各々が2種に分裂したという仮定を前提として、初頭子音・主核母音および末尾子音のそれぞれの対応系列を定立することによって共通タイ語の音素体系を明らかにできるにちがいない。

A.G. Haudricourt: "Les phonèmes et le vocabulaire du thai commun," JA, 236, 1948. はこういった立場からなされたものである。共通タイ語の音素体系と相当数の形態素あるいは単語の共通形式が再構されている。もっとも定立された対応系列から共通音素を推定するのに際して対応する諸言語の音素の弁別的特徴、とくに散発的な特異方言形のそれが十分に考慮されておらず、Haudricourt 自身もその後いく度か訂正している⁴⁾。ともかく細部の問題を除けば狭義のタイ諸語に関する限りこのような簡単な作業原則によって共通タイ語の一応の輪廓が明

(2) シャム語 $b-$, $d-$ の系列をトネームの対応様式から無声音に近い $*b-$, $*d-$ に由来するとしたこと等。なお現在ではこれらは "glottalization" を弁別的特徴とする音素と考えるのが最も妥当と思われる。たとえば $*?b-$, $*?d-$ 。

(3) モン・クメル諸語、ムンダ諸語の比較研究において "Raput-Wörter" とよばれるものがある。これにはたとえば A言語の $C_1V_1C_2V_2C_3$ に対して、B言語では $C_1'V_1'C_2'$ が、C言語で $C_2''V_2''C_3''$ が対応するといった場合がある。このような場合は対応関係を見出すことは難しい。(cf. H.J. Pinnow: Versuch einer historischen Lautlehre der Kharia-Sprache, Wiesbaden, 1959, pp.17-19.)

(4) cf. id.: Les consonnes préglottalisées en Indochine, BSL, 46, 1950; id.: Les occlusives uvulaires en thai, BSL, 48, 1952. etc.

らかにされたわけである。

2. 一方、南中国のタイ諸語をも考察の対象に含めた場合、事情はこのように単純ではない。当初知られていたものは Dioi 語⁵⁾ のみであったが、Wulff はこの言語とシャム語との対応関係をかなり詳細に調査している。しかしその対応をよく説明するような共通音素を推定することには成功していない。

その後、新たな言語調査によって南中国タイ諸語の事情が明らかにされ、タイ諸語の意味が広義のそれに拡大されるに及んで、タイ諸語内部の各要素の対応関係も相当複雑な種々性をもつことが明らかになった。

トネームと初頭子音との関係についても、基本的な関係は変わらないが、トネームに関する初頭子音の範疇は単に有声・無声の両類ではすまされない。李方桂教授は、自ら調査したチュワン語群の諸方言を分析して、“The hypothesis of a pre-glottalized series of consonants in primitive Tai” 集刊, 11, 1947. において、有声・無声の両類とは異った一連の子音音素 *ʔb, *ʔd, *ʔj, *ʔ のグループを仮定した。また西田龍雄「Tonematica Historica, トネームによるタイ諸語比較言語学的研究」言語研究25, 1954. では、狭義のタイ諸語については無声出気・気声無気・有声の3グループ、マック、スイ語⁶⁾ ではさらにいくつかのグループが仮定されている。したがって、初頭子音とトネームとの関係は、弁別的特徴の相違によって分けられる初頭子音音素のいくつかのグループがその対立を解消するに伴ってトネームが二分あるいは三分⁷⁾ されたということになろう。しかもこれには種々の事情が絡んでくるために複雑さを増している⁸⁾。

定立される対応系列の数も著しく増加する。前述の Wulff のシャム語と Dioi 語との比較においても対応系列の種々性のためにその由来を十分に説明することができなかったと思われる。初頭子音、主核母音および末尾子音の各々について得られた対応関係が著しい種々性をもつことのない場合は、対応する諸言語の音素の弁別的小および余剰的特徴あるいはその位置における allophone としてもつ種々の特徴に照らして、また他の対応系列との関係を考慮することによって、共通音素の推定は大した困難なく可能であることが多い。しかし対応系列の数が余りに多かったり、いくつかの対応系列が相互に余りに類似している場合は、われわれは単に対

(5) Dioi 語はプイ語冊亨方言 (cf. J. Esquirol et G. Williatte: Essai de dictionnaire dioi₃-français, 1908). またプイ語 (布依語, Pu-I) は貴州省に分布するチュワン語群に属する言語で、中国科学院少数民族語言研究所主編『布依語調査報告』1959. ほか詳細な報告がある。同じ語群に属するものは広西僮族自治区のチュワン語 (僮語, Chuang) のほか雲南省の一部の言語がある。

(6) マック語 (莫話 Mak) スイ語 (水家話, Sui) はともに貴州省に位置する言語で、しばしばカム語 (侗語 Kam, Tong) とともにカム・スイ語群に属するとされる。cf. 李方桂「莫話記略」集刊19.

(7) チュワン語群の剝隘 (Po-ai) の方言では、たとえば *ʔb-, *hm-, *m- がすべて m- となっており、トネームは逆に三分されている。cf. 李方桂: “The Jui Dialect of Poai: Phonology” 集刊28.

(8) 狭義のタイ諸語、チュワン・プイ語、マック・スイ語の全体について、初頭子音とトネームの関係、それから推定される若干の子音結合といった問題の詳細は稿を改めて論じたいと思う。

応系列の指標 (index) を指定するにとどまり、仮りにこれを共通音素とみなさざるを得ない⁹⁾。

西田助教授の「マック・スイ語と共通タイ語」言語研究 28, 1955. において、狭義のタイ諸語の比較によって得られた共通タイ語とマック語・スイ語と比較がなされているが、子音母音の全体にわたって約 130種の対応系列が定立されている。チュワン語を間に入れて考察すればより多くの対応が見出されるであろうからこの数は一そう大きくなる可能性がある。これらに対しては多くが単に対応系列の指標が指定されるにとどまっているが、やむを得ないことと思われる。

これに対して、チュワン語諸方言と狭義のタイ諸語とを比較した李方桂 “Consonant clusters in Tai” Language, 30, 1954. では、初頭子音結合のみについて約30種の対応系列を定立しているが、その各々に対して共通形式が推定されている。しかし多くの場合にその推定を支持する根拠は薄いように思われる。たとえば、

＜風＞ Wu. rum₃₁ Po. lum₅₅ Di. zum₁₁ T.C. *lom₍₃₎

＜水＞ ram₅₁ lam₃₃ zam₃₁ *nam₍₃₎

(Wu. 武鳴チュワン語, Po. 剥隘チュワン語, Di. Diao語, T.C. 共通タイ語)

において、共通チュワン語形式はともに *r- である。李方桂はこの *r-, と共通タイ語形式 *l- *n- の対応を説明するために *lr-, *nr- を共通形式として推定した¹⁰⁾。しかしこれはタイ諸語の音素配列様式からも考え難いことであるし、一般に共通チュワン語 *r- あるいは *hr- がどのような音素ないし音素結合に由来するかを決定することは容易ではない。常に -r- を第二要素とする子音結合とは限らないからである。事実、マック語 ＜風＞ lum₁₃, ＜水＞ nam₄₄ はそのトネームから考えて、*Cl-, *Cn- といった子音結合が予想できるのである。われわれは、(狭義の)タイ諸語、チュワン・ブイ語、マック・スイ語のすべてを説明するような共通祖語を再構することは現在の段階では十分に可能ではないことを知らねばならない。

3. ここでタイ諸語と周囲の非タイ系諸言語との通時的関係について考察しておく必要がある。K. Wulff は前掲書において、タイ諸語と中古漢語¹¹⁾との比較を試みた。そして明らかに

(9) たとえば、＜雨＞ S. fôn Lu. phôn Sh. phôn といった対応において、S. f- <*ph- と思われるから共通音素に *ph- を推定したいが、他に＜人, 男＞ S. phû Lu. pñu Sh. phu <*ph- があるために、いずれかを *ph₂- とせねばならない。*ph₂- は *f/ph- を意味させてもよい。(S. シャム語, Lu. 龍州ヌン語, Sh. シャン語) なお, p.17 参照。

(10) 実際には李教授は(狭義の)共通タイ語と共通チュワン語との対応系列を定立するという方法をとらず、シャム・ラオ・アホム・龍州・武鳴・剥隘・田州を一律に比較している。このこと自体が方法論的に問題である。なおこの論文では *l/r-, *nl- (?) としているが、“The Jui dialect of Po-ai and the northern Tai” 集刊29, で *lr-, *nr- と改めている。

(11) 中古漢語は B. Karlgren の再構したものによっている。中古漢語の再構成にあたって Karlgren は基本的に広韻の体系に基礎をおいているが、今日では一般に広韻あるいは切韻は一言語ないし一方言の音素体系を示すものではないと考えられている。漢語諸方言や少数民族言語における漢語借用語に対して比較方法を適用する努力がさらに望まれる。

共通の来源をもつと思われる形態素のかかなりの数を発見することには成功している。しかしそこから対応の規則性を見出し音素の対応系列を定立するにはいたっていない。Wulff はタイ諸語と漢語における “Infixbildung” の共通性を証明しようとしているが、今のところタイ諸語および漢語の初頭子音結合第二要素が挿入辞である根拠はほとんどなく、それへの考察に先立って、両言語がともに形態素の音節様式 $C_1V(C_2)/T$ をもっているためにいずれの要素が互に対応するかが比較的わかりやすいという利点を利用して、まず対応系列の定立に努めるべきであった。Wulff はまた遺稿 *Über das Verhältnis des Malayo-polynesischen zum Indochinesischen*, Kopenhagen, 1942. において、マライ・ポリネシア語との関係を取り上げているが、ここでも対応の規則性を見出すことには成功していない。

タイ諸語の系譜に関して、これを漢語から離して他の東南アジアの言語に結び付けようとする意見の中で特に有名なものの一つは P.K. Benedict: “Thai, Kadai and Indonesian, A new alignment in Southeastern Asia,” *Am. Anthr.*, v.44, 1942. である¹²⁾。これはラカ語・ラティ語・ケラオ語・リー語（ダイ語）といった南中国からトンキン地方に分布する言語を Kadai 語群とし、これを媒介にタイ諸語とインドネシア諸言語とを系譜的關係につなぐことを意図したものである。一方 A.G. Haudricourt もこれと独立に類似した意見を主張したことがある¹³⁾。タイ諸語が漢語と共通してもつ形態素の多くは高度の文化語彙のそれであって言語接触による借用の可能性のあるものであり、タイ諸語の *substratum* はむしろラティ語などの南アジア諸言語に求めるべきであるというものであった。西田助教授はこれを批判してより基礎的な語彙においてもタイ諸語と漢語との共通語根を見出すことができると主張されている¹⁴⁾。

ともかくタイ諸語が漢語はもとより広く東南アジア諸言語と、それが系譜的発生的なものであるか言語接触によるものであるかは別として、何らかのしかも相当深い歴史的関係にあることはもはや疑いの余地がない。この仮定を実証するためには、タイ諸語と他の諸言語との言語形式の間に規則的な対応関係を見出し、そこからいくつかの対応系列を定立してさらに可能ならばそれに十分な音韻史的説明を加えるという比較言語学的な操作をより広範囲にかつ厳密にほどこさねばならない。したがって又、同時にその仕事は前節で述べたような狭義のタイ諸語と南中国タイ諸語との全般的な比較考察における種々の困難をも解決するものでなければならない。いいかえれば、タイ諸語の比較研究自体が中国および東南アジアの諸言語の全体的な比較研究の中で行われなければならないわけである。前にあげた <風> *l~r- <*Cl-, <水> *n~r <*Cn- に対しても、漢語<風> *pjwəm <*pl-, 原インドネシア語<水> *danam を比較することによって問題の解決の手掛りが得られるものと思われる。

(12) cf. 松山納「タイ語の系統に関する P.K. Benedict の異説について」東京外大論集3, 1953.

(13) cf. 前掲論文 (1948)

(14) cf. 西田龍雄「タイ語と漢語」東西学術研究所論叢49, 1960

ただここで問題なのは、タイ諸語における形態素の音韻形式のいずれの構成要素が他の諸言語のそれに対応するかということが、タイ諸語内部の対応の場合のごとく単純な原則をなすとは予想できないことである。音節様式のほとんど等しい漢語との間でさえ、タイ諸語の C_1V 音節に漢語の $C_1'V'C_2'$ が対応するといった例は数多くある。ましてインドネシア語のような多音節形態素をもつ言語との対応様式は著しく複雑であるにちがいない¹⁵⁾。したがってこういった研究はそれが成功するとしても極めて複雑なものとならざるをえないことと思われる。

4. さて、タイ諸語の比較研究にとって利用することのできる古文献資料は今までに余り多くは知られていない。Ramkhamhāng 碑文をはじめとするシャム・ラオ語碑文、『百夷館訳語』『暹羅館訳語』『八百館訳語』といった華夷訳語がその主なものであるが¹⁶⁾、これらの資料がどの程度に比較研究に価値があるかは問題である。しかしこれがシャム語・ラオ語あるいはシャン語といった個々の言語ないしはそれを中心とする小語群の歴史的な研究にとっては大きな意義があるにちがいない。それがまた比較言語学的研究の目的の一部を果たすことも事実である。

従来行われてきたこれら古文献資料の研究は専ら解読研究といったものであって、その資料に用いられている言語体系を再構しようとするものではなかった。音韻についても結果的にはただ原語の文字をローマ字転写するに終っていた。これには、当時比較研究が未だ十分な成果をあげていなかったという原因のほかには方法論上の問題があるが、その詳細は資料毎に異なる。

それに対して、西田龍雄「十六世紀におけるパイ・イ語—漢語、漢語—パイ・イ語単語集の研究」東洋学報 43.3, 1960. は比較研究の新たな成果を取入れるとともに、方法論上の再検討¹⁷⁾が行われている。これは、シャン語・現代パイイ語と同助教授自身の再構による共通タイ語との関連において『百夷館訳語』の言語を考察したものであって、結果的にはシャン語群の音韻史的研究というべきものとなっている。『百夷館訳語』はシャン語に、『暹羅館訳語』はシャム語に、『八百館訳語』はチェンマイ・ラオ語に当たるとされるが、後二者についても同様の検討を加えることは意義あることである。特に『八百館訳語』は北部タイ (Phāyap) 地方の諸方言の研究にとって大きな役割を果たすにちがいない。碑文、とくに Ramkhamhāng 碑文もまた、部分的に方言的特徴をもっており、シャム・ラオ語群の歴史的研究には不可欠な

(15) 仮りにタイ諸語と漢語とが本来は多音節語でありながら互に異った過程をへて単音節化したものとするれば、対応の様式はいっそうこみいったものとなるであろう。

(16) これまでに、これらについて Burnay, Coedès, Bradley, 泉井久之助博士らの先駆的研究がある。cf. C.B. Bradley: "The oldest known writing in Siamese," JSS, 6, 1909; G. Coedès: "Notes critiques sur l'inscription de Rama Khamheng," JSS, 12, 1918; 泉井久之助『比較言語学研究』1949 所収諸論文その他。

(17) 資料自体から与えられる情報のみを手掛りとする closed な方法を捨てて open な方法を取り。又、文字言語と音声言語との混同を避けるために漢字による音表記を重視するといった立場がとられている。

資料であるが未だ言語学的な新たな研究はない。

資料に関して一つ付加えるならば、いうまでもないことだが、興味ある特徴をもった未調査の方言が未だ数多くあるにちがいないということである。たとえば、S. Egerod はいくつかの方言調査の報告をなしているが¹⁹⁾、"Studies in Thai dialectology," AO, 26, 1962. においていくつかの興味ある事実を示している。一例をあげれば、未だ十分説明されていない *f/ph- の系列に対してマライ半島 シャム語では kɸ-, kw- といった音素が対応しており、これから *q^w-, *G^w- を共通音素と推定することができるというのである。この推定には問題があるけれども重要な事実であるにはちがいない。われわれは可能な限り多くのタイ諸語、諸方言について少なくともその音素体系、基礎語彙および比較研究上に大きな手掛りを与えることが予想されるいくつかの語彙を採録記述しておくことが望ましい。

5. 東南アジアの諸言語を研究する目的には種々のものがあるであろう。この地域の文化、社会を総合的に理解しようとするいわゆる「地域研究」のための手段という場合がある。もちろんこの時は実用語学的傾向が最も強くなるであろう。またそれ自体を地域研究の一部として行うこともありうる。これは言語の研究を通じてこの地域の民族の思考方法のタイプとか社会構造を研究しようというものであるが、この場合には＜言語構造＞よりも＜言語の使用＞の問題として取り上げるべきように思われる。ある民族がどのような構造をもった記号体系で伝達を行うかということよりも、どのような場合にいかに表現しどのような言葉を受容した場合にいかに反応するかという事実の方がその民族の文化や社会の型との相関度が高いと考えられるからである。ただしこのような研究の方法論は未だ確立していない。一方また、民族の宝庫ともいうべき東南アジアの研究において、民族の源流という問題は確かに一つの大いに興味ある課題である。これは上のような地域研究とは異った先史学的人類学的研究の問題である。東南アジア諸言語の相互の genetic な関係を究明することがこのような研究の重要な一部門をなすことは明らかである。最後に全く言語学的な立場からこれら諸言語の歴史的比較言語学的研究をする場合がある。

以上に述べてきたタイ諸語比較研究は概ね第三・第四の立場であると思われる。しかもそれなりに一応の成果があげられていると考えてよい。それがどのように評価されるかということは今後のタイ諸語比較研究の結果とともに将来の東南アジア研究の在り方によって決定されるであろう。

(19) "Essentials of Khün phonology and script," AO, 24, 1959. ほか。